

遠藤周作「日本の聖女」に見る切支丹の道

— 日本的な美意識を中心に —

宮崎尚子

はじめに

遠藤周作は「日本の聖女」の中で細川ガラシャ（明智珠）の姿を、外国人修道士の眼を通して描いている。

切支丹でありながら、戦国武将の妻として自決と言う道を選ばねばならなかったガラシャを「戦国時代の多くの女性と同じように男がつくる政治と戦の世界のなかで、自らの意志をこえた運命を甘受せざるをえなかった女の姿」としながらも、「勇気ある篤信の、潔い女性としての従来イメージとはやや違うかもしれない」と設定している。従来は貞女、烈女、

聖女というイメージとして捉えられ、西洋でも「気丈な貴婦人（グラシーヤ）」という戯曲で知られ、オペラとして一六九八年七月三十一日にイエズス会の劇場で上演された。夫である豪味かつ野蛮な君主の悪逆非道に耐えながらも信仰を貫き、最後は命を落

として暴君を改心させたガラシャの死は殉教とされた。日本でいうと元禄時代の作品で、運命に翻弄されたハプスブルク家の令嬢には好評だったと伝わる。

遠藤はこのようなガラシャを日本の聖女として描いているが、そこには切支丹としての聖女と言うよりは日本の宗教における聖女と言う意味合いがある。そこから分る遠藤の考える切支丹の生き方と、日本的な美意識を明らかにする。

一、切支丹の道

「日本の聖女」の語り手は外国人修道士である。この修道士から見ると、日本人は苦悩から逃げる為に宗教に救いを求めると捉えられている。しかし本来の切支丹の教えは人生の苦悩から逃げずに傷つきながらでも生きぬくことが大事であるとする。

【本文1】 宗教とは世を捨てることではなく、世の泥沼のなかにもがき生きることだと、パードレは小侍従にも奥方にも申されるべきだった。ゴルゴダの丘まで、あの暑い日、主が重い十字架を捨てられなかったのは、人生の苦しみを引きうけ、人生の苦しみにうち克つためだったと教えられるべきだった。(p.316上 & 12)

この時代、忍耐は日本人の美德とされていたが、この忍耐を夫婦の愛で実践しているガラシヤに修道士は否定的である。信仰する「切支丹」の解釈は別として、ガラシヤは信心深い敬虔な信者として描かれている。ガラシヤは自身の信じるころの「切支丹」の教えを守っているが、それは愛に満たされた生活というよりは、忍耐を強いる日々であり切支丹の教えとは違うものになっていると修道士は感じている。キリストのように、どんな屈辱を受けても生き続けることが切支丹の信仰の道である。こういった生き方とは反対に日本人は潔さを優先する。修道士の考える本来の切支丹の生き方をしているのは小西行長である。しかし彼は主を裏切った卑怯な「転び者」

として、多くの日本人たちから蔑まれていた。

【本文2】 おのれの弱さのため現世を回避するだけが切支丹の道ではなく、小西殿のように現世のなかで卑怯者と見られながらも、術策をこらして主のために生きるのも切支丹の道ではないかと、私は言いたかったのである。だが女の侍従には私の考えは不服らしく、「侍は潔いことが、よろしうございます」やりこめられた不満を頬骨のたかい顔にみせて、「われら女にはそのような小西さまの御口ぶりも、どうやらおのれを正しうするための口実に思えます」日本人の正義はいつも美に結びついているから、策を弄するような行為はたとえ正義のためでも、美しくない、潔くないと考えがちなのだ。だから彼女や奥方が高山殿の行為を天晴れと思ひ、小西殿のそれをどうしても厭わしいと考えるのは日本人風なのである。(p.318上 & 18)

卑怯者と言われても、現世を回避せずに真正面から受け入れ、生きる小西の生き方こそが切支丹の道であると修道士は考える。しかし日本人である侍従は、「侍」の潔さを基準に考えている。このように、

日本人の美德には正義というものが深く絡まっており、そのコミュニティの中ではあくまで潔さが称賛される。

【本文3】奥方もまたその現世の十字架を担おうとするのではなく、むしろ放り出すことが宗教的だと言う気持ち強い。それはあまりにも日本人風であるゆえ、私は疑惑に捉えられるのだ。この国に来て以来、仏教と切支丹との根本的な違いは、この世の十字架を捨ててそれを解脱とよぶか、それともこの現世の十字架を主と同じように死まで肩に背負って歩くかの相違にあるような気がする。そして私にはそこに切支丹信仰の美名をかりた異端の臭いを嗅ぎとらざるをえなかったのだ。「死はこの濁世からようやく離れ、天国に参ることなれば、わたくしはむしろ悦ばしきこと願わしきことと前々から考えて参りました」その言葉のかけに私は悪魔がいかに巧妙に人間の心のなかに、いや神を求める心のなかに滑りこむかがわかるような気がした。(奥方のお心には何か間違っているものがある)(p.326上 & 16)

修道士から見た場合、切支丹の間では天晴れと絶

賛されていた高山はむしろ無責任で、非難を浴びながら生きている小西の方が切支丹的である。高山やガラシャのような生き方に終始異端の匂いを感じて取っている。

【本文4】関ヶ原で敗れた行長殿は木曾山中に一人、落ちのび、自刃の機会があったが、糟賀部とよぶ山村で村人に自首した。その後、さまざまに恥辱を受け、鉄の首枷をはめられ、十月一日、都を荷馬車で引きまわされ、衆人たちから卑怯者よ、と罵られ、切支丹からは転び者よ、と蔑まれながら首をはねられた。(p.329上 & 12)

この時の小西はゴルゴダの丘のイエスと重ねられている。この生き方こそ修道士の考える切支丹の道だったが、日本では受け入れられず、ガラシャや高山右近のように潔い生き方の方が受け入れられている。修道士の言葉には「日本人の正義」「日本人風」という個所が随所に見られる。遠藤自身もキリストを修道士と同じように捉えている。

【資料1】イエス像というと、人に侮られるイメージが上がってくる。もちろん最終的にはそれがひ

つくりかえって栄光あるキリストのイメージなる。
〔対談「最新作『深い河』―魂の問題―〕「国文学」
1993年9号 学燈社)

しかし実際のところ、日本に入ってきた切支丹の
教えは微妙に変容していく。このような現象は日本
的な土壌がそうさせているのだと遠藤は考える。

二、日本という土壌

当時の戦国武将の常識では、有事の際には城を枕
に討ち死にをするのが一般的であった。当然妻もそ
れに準ずるものと考えられており、妻の自決は決して
珍しいものではなかった。

【本文5】「あの方は武将の奥方として道を選ばねば
ならなかった。その折も教会の禁じている自決をな
さらず家臣の手を借りられた。だからあれは自決で
はありませぬ。奥方はこうして殿への節を貫ぬき、
切支丹の教えをかたく守ろうとされた」(中略)これ
以上、生きのびるよりは、早く現世から去りたいと
言う欲望がどこかで働いたのだと私は思う。高山右
近と同じようにあの方の心には世を厭う気持ち、濁

世に生きることを厭う気持ちがふかく根ざしており、
そしてその厭世は主の教えではなくこの国とこの国
の仏教によって育てられたような気がする。(p.328
下〆8)

神の決めた運命を人間が変えるのはおこがましい
という理由から、自決は切支丹では禁じられている。
そこでガラシャは武士の妻の教え、切支丹の教え、
双方を折衷するかのような選択をした。修道士はこ
の厭世感にこそ、日本の仏教の教えを嗅ぎとる。

【本文6】「あの方は」管区長は次の言葉を説教の結
びとされた。「日本の聖女のような気が致します」日
本のという言葉に耳にした瞬間、私は思わず、うつ
むいた。うつむいたのは、その瞬間、耳の奥で聞え
た奥方への冒瀆の声を打ち消すためである。現実世
界の汚れた苦悩をすぐ棄てて、浄土を願うのが日本
人の宗教ならば、奥方は切支丹として死んだのでは
なく、日本人の宗教で亡くなったのだ。(p.328 下〆
23)

現実の世界の汚れた苦悩をすぐ棄てて浄土を選択
したガラシャの生き方はいかにも日本的な宗教の考

え方で、切支丹の教えではない。日本の宗教で亡くなったのだから、ガラシヤは日本の聖女であること
ない間違いはない。この場合の日本の宗教とは古神
道に仏教、儒教が融合したものだと思われる。江戸
時代に定着した武士道では親子一体、夫婦一体、国
家国民一体と捉え、私より公を優先する風潮があつ
た。これが皇室への尊崇、主君への忠誠、親や先祖
への孝養などの思想を生むことになる。日本でカト
リックが受け入れられた背景には次のようなことが
考えられる。

【資料2】 弥陀の誓願不可思議の絶対性を主張し、人
間は悪にまみれたその姿のまま弥陀の手に救われ
るといふ浄土教思想とのあいだに、類縁を認めてい
るのである。人間の自由意志を認めず、称号を唱える
こと以外に、何等の倫理的行為へも人を導かないと
ころに日本の思想と、それが同類だという意味で、
ジャンセニスムは氏にとつて日本的信仰の問題であ
り、切実な問題だったのである。(山本健吉「遠藤周作
―その一貫した主題―」『新鋭文学叢書6 遠藤周作集』
筑摩書房1960年8月)

かつて大乘仏教が日本人の好みに合わせて変容し
たように、カトリックもこの国で変容した。日本人
は弥勒を受け入れるようにイエスも受け入れた。和
魂漢才、和魂洋才の土壤がある。いかにも汎神論的
な風土である。ガラシヤの選択はこういった意味で
は、日本人的な解釈であり教義の変容である。

【資料3】

遠藤 ただ、芥川さんが「神神の微笑」のなかで、
つくりかえるのだということを言っています
ね。「つくりかえるのだ」と言ったことは、芥
川さんは否定的な意味で言ったのです。

三好 ええ、そうです。

遠藤 私はそうではなく、積極的な意味で「つくり
かえるのだ」と言うのです。本質にあるもの
を掘り出して、ヨーロッパにあるもののかた
ちではないけれども、キリスト教の原則に合
ったものにしてしまうのだ、という・・・。

〔対談 文学―弱者の論理〕遠藤周作 三好幸雄『国
文学』学燈社1973年2月)

武士の妻であるが故の、キリスト教解釈であった。

ガラシャは教義を日本人好みに「つくりかえたのだ」。ところで、側室を持つと言った夫に絶望し、信仰の道に生きるガラシャのそのひた向きな神への眼差しにはリアリティがある。それは遠藤自身の経験が影響している。遠藤作の両親は、彼が9歳の時に離婚しており、父常久はその後16歳年下の愛人と再婚している。その時の母の様子を次のように描いている。

【資料4】 夫から棄てられた苦しさを信仰で慰める以外、道のなかつた彼女は、かつてただ一つのヴァイオリンの音に求めた情熱をそのまま、ただ一つの神に向けたのだが、その賢明な気持ちには、現在では、納得がいくものの、たしかに、あの頃の私には息苦しかった。「母なるもの」遠藤周作全集10巻p.215上p.7)

愛人ができ、苦悩する母は「日本の聖女」の中のガラシャの姿と重ねられる。ひたすら信仰に生きる母の姿に遠藤は反抗していた時期もあった。その母に対する疑問や同情が、「日本の聖女」の中で修道士の視線としてガラシャに向けられたのである。これは本当に愛を教えたキリスト教なのか。どんな時に

も人生を投げ出さずに生きると言ったキリスト教なのか。潔い決別を望むのはあまりに日本的である。これはキリスト教というよりむしろ、日本の宗教ではないか。この問いに対する遠藤の答えが、小西行長の生き方である。彼のような生き方こそ、キリスト的な行動であり、キリスト教的な生き方なのだ。

結論 日本的な美意識

【本文7】 日本人はなぜ、穢れたもの、濁ったものから逃れることを宗教的な生き方と考えるのであろう。現世はそれ自体、穢れたものであり、生きることもまた穢れたものであり、結婚生活さえもまたさまざまの穢れがつきまとっている。だからこそ、教会はそれを捨てるな、と教えた。離婚を禁じ、自殺を罪とみなした。それは、これら濁った渦のなかで生き続けるのも愛だと教えるためだった。にもかかわらず奥方は既に殿から心を離して、現世で生きることも捨てたいと考えている。そしてその考え方を切支丹の考え方だと錯覚している。(p.386下p.22)

潔さ、正直さを美德としている。従って恥よりも死

を選ぶという感覚が一般的である。ここに禊などを大事にする古神道の影響が見られる。自殺は罪であるというキリスト教の教えも大儀の為の殉教という言葉の前に掻き消されてしまう。私を犠牲にして

公の為に死ぬことへの賞讃がある。「犬死」という言葉から見られるように意味のある死を美とみなす文化がある。そして個人ではなく自分の所属する共同体の為に死ぬことが美しいと思う。西洋の美のように人間中心ではなく、共同体を中心とした美学であると言える。つまり同じ死ぬでも意味のある死に方を尊び、使命を全うすることを美德とする精神である。世阿弥の「風姿花伝」にいう「秘すれば花」と同じ認識が見られる。つまり日本人には全体的調和を重んじ自己主張を抑制し隠蔽することによって却って受け手の想像力を刺激し、日本人特有の奥深い表現を成し得る側面がある。ガラシヤの辞世の歌には「花」という言葉が使われている。

【資料6】 散りぬべき時知りてこそ世の中の花も花なれ人も人なれ

潔さは美とみなされていた時代、散る時を知って

こそ、この人生は意味がある。確かに日本的な美意識が読み取れる。遠藤は西洋の美と比較して日本の美を次のように言う。

【資料7】 境界や区分の意識、対立性、能動的という三つの特徴をその底にもった西欧の美的感性と、これらのものを持たぬ代りに、受身的であり、はつきりとした区別や境界を嫌い、全的なものへ、そのまま吸収されたいという郷愁をもった我々の、感性とのちがいを私が今、ここに大ざっぱに述べたのは、結局、この後者の感性がカトリックに帰依した後もたえず、私を誘惑し、その世界にひきずりこもうとしているからにほかならない。私はこの感性が生み出した詩や芸術にたまらなくせられ、魅せられては、はっとしてある恐怖を感じるのである。(『日本的感性の底にあるもの』『宗教と文学』昭和38年7月 南北社)「この日本的感性が孕む虚無は時として私を慄然とせしめるのである。」

ガラシヤの選択が日本の聖女として成立したことに對する修道士の戸惑いには、日本的な美意識への戸惑いが感じ取れる。切なく消えていく命だからこ

そガラシヤの美は輝き、もののあはれを感じさせる。ガラシヤの行動は当時の人々に感動を与えた。反対に修道士は聖女に祭り上げられる傷ましい女性の姿をそこに感じ取った。それでも聖女と考えるのは、その真つすぐな信仰心に対してである。決して切支丹としての聖女ではない。遠藤はそんな日本の美意識に殉じたガラシヤに同情しながらも、小西のような生き方に切支丹の道を認め、真の殉教者として見ている。

※本文はすべて『遠藤周作文学全集』第八卷（1999年12月10日 新潮社）による。